デザイナーのための経済コラム（44）

「こと」から「もの」へ、「もの」からことへ認識の移り変わり

from thinking or doing to things, from things to thinking or doing

令和6年度のJIPAK代議員会（総会）で併催として細尾 真孝氏による国際セミナーが開催されました。
ご自身が音楽活動をされていたのを止めて、家業の西陣織を引き継いだとのことでした。音楽と西陣織には
似たようなところがあると、軽く話されていました。この話は私にとって非常に興味深い有益なお話でした。

織物を作る工程では、最初に完成したものを想定して設計し、材料としての糸を準備して
織る作業に入ると思います。その流れに多種多様な職種、職人が関わっていると言われます。
その話から直ぐに連想されたのは輪島の漆器でした。輪島でも多種多様な職種、職人が関わっていて、
一つでも抜けると漆器を作れなくなると言われています。

織りの工程は音楽の演奏だと思います。時間がリズム的に流れ、始めと終わりが必ずあります。
設計すること（thinking）、織ること （weaving）この時間的経過に緩急リズムが伴います。
織り上った反物（thing）には時間の経過を伺い知れても、時間的な要素は埋没して
しまっています。

作曲し、演奏する流れは同じと思います。音楽演奏を聴くということは織り工程の現場に入れてもらう
ようなものに思います。演奏された音楽がﾚｺｰﾄﾞ、CD、ﾃｰﾌﾟになるとそれは物になってしまいます。
ﾚｺｰﾄﾞ、CD、ﾃｰﾌﾟ(物・things)に時間要素が加わり、再生され、鑑賞される(playing, listenig)とものが
こと(doing)に変わります。

料理も同じように、献立、ﾚｼﾋﾟを考え、材料を揃え、調理器具を揃えて調理に入ります。調理に時間は重要な要素です。
出来上がった料理は物(things)です。料理が食される(eating)と物からこと(doing)に変わります。料理の世界では
知っている調理の手法しかつかえません。知っている調味料、食材しか使えません。持っている調理道具しか使えません。
中華料理では地方によってそれらの要素が変わることで特色が出てきます。同じことが和食、ﾌﾚﾝﾁ、ｲﾀﾘｱﾝでもいえます。
フレンチでは最近、既存のﾚｼﾋﾟにこだわらずに他国の料理レシピ、新しい化学的、物理的手法や材料、調理器具に挑戦
しようとしています。それをﾇｰﾍﾞﾙ・ｷｭｸｽﾞｰﾇ(nouvelle cuisine・新しい料理）と呼んでいるようです。

どの分野でも、新しいことは当然ながら既存の手持ちの要素だけでは切り開けません。
ﾖｰｾﾞﾌ･ｼｭﾝﾍﾟｰﾀｰ（Joseph Alois Schumpeter1883～1950）は創造的破壊（creative destructure）として経済発展を
定義しました。創造することはどんなことかを追求しようと工学が1960年代にｱﾒﾘｶで生まれました。そのころ
技術革新の概念・思想を「重厚長大」とし、さらに「軽薄短小」へと発展させて来ました。21世紀に入って情報革命
と呼ばれて技術の思想も変わってきているようです。IT産業の技術概念は「極微細、超高速、大容量」に変わって
いると言えます。それが AI artficial inteligent 人工頭脳の世界を切り開いていると思います。

「極微細、超高速、大容量」を進めるためのヒントの一つが「際・きわ inter-」の発想かと思います。「際・きわ inter」
の発想は20世紀のものだと思いますが、まだ有効だと思います。「際」を使った新しい造語は「国際・inter-national」、
「学際・Inter-disciplinary」、「業際・inter-business」があります。最近はあまり見たり聞いたりすることがない古い
言葉に「山際・やまぎわ」、「水際・みずぎわ」、「瀬戸際・せとぎわ」、「際どい・きわどい」、「間際・まぎわ」が思いつき
ます。 言葉としてはこれほど造語の仕組みが明瞭ではない言葉に経済学と認知心理学の組み合わせから生まれた
「行動経済学」があり、一方では組み合わせが明解な色彩と流行から作られた「流行色」があります。

面白いのは「カラオケ」や「スシ」の語源、造語された状況を知らずに外国人は「karaoke」、「sushi」といって
いることです。その逆に日本人としては語源、造語の状況を知らずに使っている言葉も多くあるように思います。

そんなことを全然知らなくても、何物にも捉われない自由で柔軟な好奇心、想像力は創造力の原動力となっていると思います。

（T.K.）